

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.21

編集 1990.3.31
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 牟田口 尚
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大
里乙3617



かけわけゆうくつちawan
掛分釉沓茶碗

館蔵資料

福岡・高取焼・内ヶ磯窯
17世紀前半
口径13.5×12.1cm 高さ6.7cm
高台径5.6cm

胴の二方を押えてゆがませ、いわゆる沓形にする。また藁灰釉と鉛釉を掛け分けて施釉し、景色をつくる。胴部にはロクロ跡の段が付き、高台は低く削り出している。織部好みの作風をよく伝えている。内ヶ磯窯跡（福岡県直方市）から、同様の沓形茶碗の陶片が出土し、この茶碗も同窯の作と比定されるようになった。

特別企画展のお知らせ 開館10周年記念

「海を渡った肥前のやきもの」展

○主旨

肥前磁器は17世紀初頭に日本で最初の磁器として誕生した。その後、有田皿山を中心に急成長を遂げ、およそ40年後の1650年代になると中国磁器に代わって海外輸出を始めた。めざましい技術革新によって、1659年に始まるオランダ東インド会社からの大量注文にも応え、東南アジアからヨーロッパにまで運ばれることになった。

普通、古伊万里と呼ばれている肥前磁器の海外輸出は、17世紀後半から18世紀初頭にかけて盛んであったが、その後はオランダ東インド会社の衰退とともに激減する。この時期に輸出された肥前磁器の数量は記録に残っている分だけでも370万個以上になり、記録に残らなかったものを含めれば730万個以上の肥前磁器が輸出されたものとみられている。このように肥前磁器は江戸時代において我が国最大の輸出工芸品産業であった。

ところが実際にどのようなものが、どのような地域に輸出されたかの実態は、ヨーロッパを除くとよく分かっていない。またヨーロッパの伝世品はかなり日本に紹介されているし、過去に何度か里帰り展が開かれたこともある。しかし、記録上、オランダ東インド会社が東洋貿易の本拠地を置いたインドネシアや、かなりの量が輸出されたインド、中近東などはわずかな例が紹介されているに過ぎないし、日本でこの地域に輸出された肥前陶磁を扱った展覧会は開かれたことがない。

平成元年度に調査した結果、インドネシアやタイに豊富な内容の肥前陶磁が渡っていたことが明らかになった。よって、この地域の肥前陶磁の特徴を明らかにし、日本と東南アジア諸国との、陶磁器を通じての交流の歴史を紹介することが、10周年記念展の主旨である。

○展示構成（予定）

インドネシアの肥前陶磁	104点
タイの肥前陶磁	13点
インドネシアの遺跡出土の 肥前陶磁	359点（陶片）
タイの遺跡出土の肥前陶磁	72点（陶片）
長崎オランダ商館跡出土品	30点（陶片）

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館 第1・2・3展示室

○会期

平成2年11月1日（木）から12月9日（日）まで
休館日 11月5日（月）、12日（月）、19日（月）、
26日（月）、12月3日（月）

○主催

佐賀県立九州陶磁文化館

○後援

外務省、文化庁、国陶交流基金

○図録

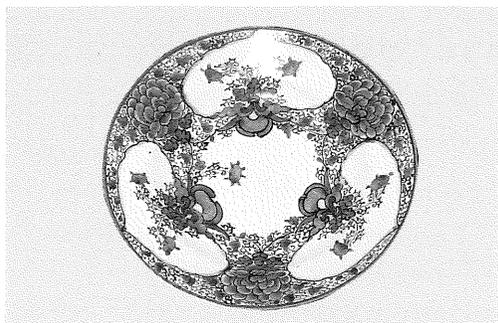
展示作品の図録を刊行する。

○観覧料

大人	510円（410円）
大学・高校生	250円（150円）
中学・小学生	150円（100円）
（ ）内は20名以上の団体料金	



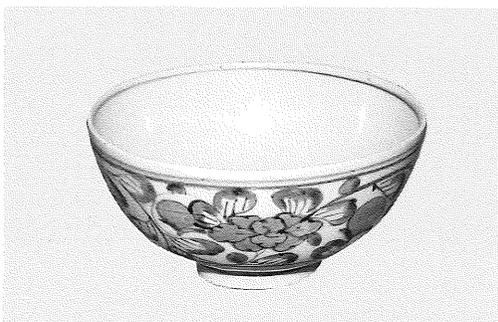
染付芙蓉手花籠文大皿 17世紀末
口径39.0cm 進藤コレクション



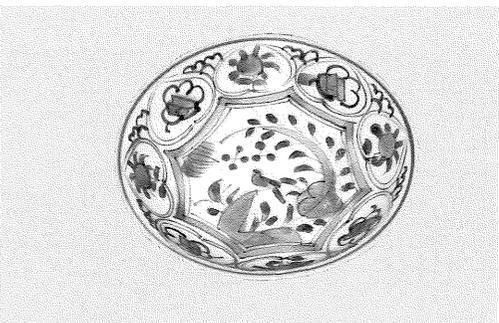
染付牡丹文大皿 17世紀末~18世紀初
口径32.5cm 進藤コレクション



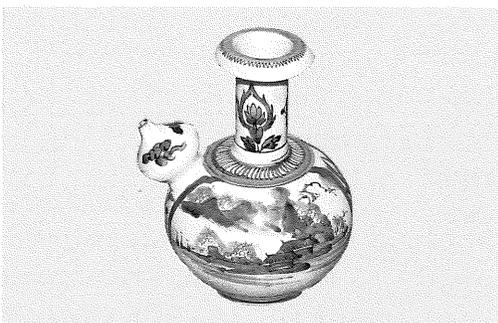
染付鹿に紅葉文大皿 17世紀末~18世紀初
口径32.1cm 進藤コレクション



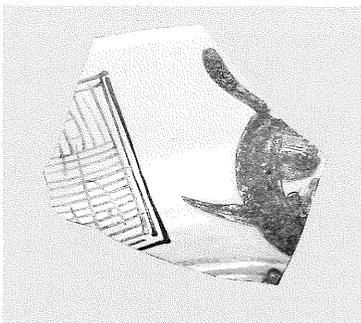
染付牡丹唐草文鉢 17世紀末~18世紀初
口径21.6cm 進藤コレクション



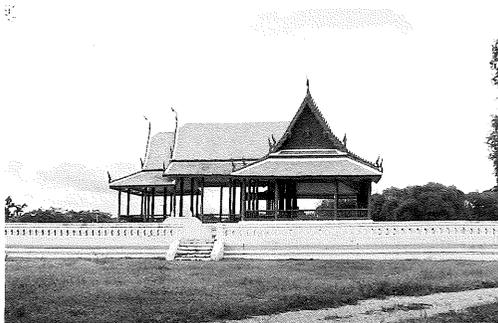
染付芙蓉手花鳥文小皿 17世紀後半
口径13.6cm 進藤コレクション



染付山水文ケンディ 17世紀後半
高さ21.5cm 進藤コレクション



ジャカルタ・パサリカン遺跡出土
色絵印判手大皿(吉田2号窯)



タイ・アユタヤ王宮跡

展覧会のお知らせ

柴田コレクション展(Ⅰ)

○主旨

この度東京都在住の柴田明彦・祐子氏ご夫妻から、17世紀の柿右衛門様式の染付磁器を中心とした作品約1000件2300点の寄贈の申込みがありました。当館ではこれを記念して柴田コレクションの展覧会を開催します。量的に多いので、コレクションを2回に分けて紹介します。平成2年度はその第1回目で、半分を展示します。同コレクションは、17世紀末に完成する柿右衛門様式の作品が、どのような過程で成立していかを体系的に説明することが出来る、学術的に価値の高いものです。また様式の変遷が明らかになるばかりでなく、江戸時代の最高級の食器文化を楽しむことが出来ます。

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館 第1・2・3展示室

○会期

平成2年9月15日(土)~10月25日(木)

休館日 9月17日(月)、10月1日(月)、8日(月)、
15日(月)、22日(月)

○図録

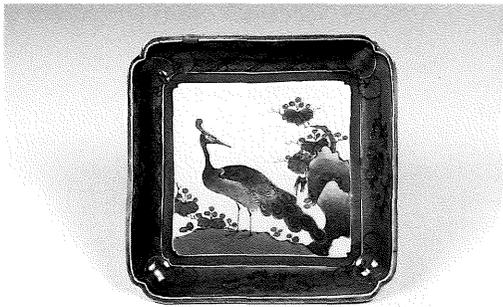
展示作品の図録を刊行する。

○観覧料

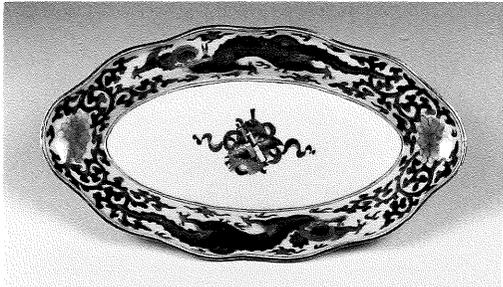
大人 200円 (150円)
大学・高校生 150円 (100円)
中学・小学生 70円 (50円)
()内は20名以上の団体料金



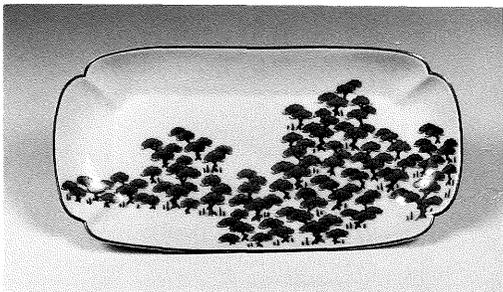
染付心字に猿馬文輪花深皿
口径15.1cm 高さ5.6cm 底径8.4cm



染付孔雀文角皿
口径12.0×11.8cm 高さ2.4cm 底径7.5×7.4cm



染付竜宝文舟形皿
口径22.7×12.7cm 高さ4.4cm 底径16.0×6.8cm



染付松竹文長皿
口径21.9×10.9cm 高さ3.3cm 底径14.3×5.3cm



染付鹿紅葉文皿
口径14.2cm 高さ2.4cm 底径8.9cm

行事・展覧会スナップ

学芸員実習

平成元年度の学芸員実習は、7月24日から8月12日まで3週間行われました。受講生は7名で、西南学院大学の中島弘樹さん、梶山洋子さん、原裕子さん、岡本美香さん、上智大学の森永敏文さん、佐賀県立有田窯業大学の庄司和男さん、矢野節さんが修了されました。期間が例年よりも1週間長く、受講生にはなかなか厳しかった様ですが、充実した実習でした。

青少年科学活動促進事業 焼物科学教室

平成元年度の佐賀県青少年科学活動促進事業の焼物コースは、平成元年11月25日から12月17日までの土曜日と日曜日の計8回、当館の施設を利用して行われました。受講生は橘小学校の尾崎真一郎さんをはじめ小学校4年生から中学校2年生まで13名が参加しました。焼物の種類や製作工程の学習や実技など、体験的な学習がなされました。



実習風景

第26回陶磁器試験研究機関 作品展

平成元年8月22日から8月30日まで、全国の陶磁器産地にある試験研究機関による作品展が、第1展示室において開かれました。「くらしとやきもの」をテーマとした食器、食卓用品、インテリア用品等の試作品、指導製品など103件が出品されました。



展示風景

特別企画

「日本の青磁」展

当館の平成元年度特別企画展として、9月30日から11月5日まで、第1・第2・第3展示室において「日本の青磁」展が開催されました。中国にはじまる青磁は、日本でも17世紀から生産が始まり、江戸時代を通じて、各地で特色ある青磁が焼かれました。また近代・現代の陶芸作家による様々な作品も制作されています。本展では伊万里焼や鍋島焼、三田焼など282件に、古窯跡出土陶片66件を加え、また佐賀県窯業試験場において科学的に分析されたデータやテストピースも展示され、32日間の会期中、15,743人の入館者があり、好評のうちに無事終了することができました。



開会式のテープカット

有田工業高校卒業制作展

平成2年1月20日から1月28日まで第1展示室において、佐賀県立有田工業高校卒業制作展が開催されました。昨年まではデザイン科のみで行われていたのを、今年から窯業科が加わり、陶磁器作品をはじめ、グラフィックや立体作品などが展示されました。



展示風景

第8回西松浦郡小中学校 学童美術展

平成2年2月3日から2月18日まで、第1展示室において、第8回西松浦郡小中学校学童美術展が開催されました。陶芸作品や紙や粘土などを使った様々な作品が展示され、多くの入観者でにぎわいました。



展示風景

第2回伊万里陶青会創作展

平成2年2月20日から2月25日まで、第1展示室において、第2回伊万里陶青会創作展が開かれました。今年のテーマは「遊膳」で、遊び心を生かした個性豊かな表現を目指し、種々の作品が出品されました。



田森陶園の吉祥遊膳

第4回有田窯業大学校 卒業制作展

平成2年3月6日から3月11日まで、第1展示室および展示ホールにおいて、第4回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開催されました。大きな作品が内庭にも展示され、各々の研究の成果が出品されました。



展示風景

第5回有田陶交会展

平成2年3月20日から3月25日まで、第1展示室において、第5回有田陶交会展が開催されました。今年のテーマは「お茶にしましゅうゆとりの時間」で、3月21日には食卓演出家の原田治子先生による記念講演会も行われました。



展示風景

シリーズ

やきものにみる文様 (18)

 よう
 らく
 瓔 珞 文 様

瓔珞はもとインドの上流階級の人々が身につけたもので、珠玉や貴金属を編んで頭や首や胸にかける装身具である。これがのちに菩薩像などの身を飾るものとして用いられ、寺院内でも天蓋の装飾に用いられた。

(悟りをひらいた段階の仏像はこの飾りつけない)

ヤシの木の扇状に葉が茂った形のバルメット文はアッシリアに起源があるといわれ、ギリシャ・ローマを経て中国漢代に伝わったという。花を編んで作った網の「花綵」文様はなづながこれであり、瓔珞文様はバルメット文とよく似ており、より一般的な通称といえよう。

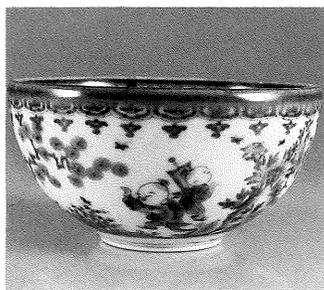
中国北齊・隋時代(6~7世紀)の青磁壺の陽刻文様に瓔珞文様があらわされている。河北省景県封氏墓出土の「青磁蓮弁文六耳壺」(故宮博物院蔵)が有名。

御室仁清焼おむろと関係の深い仁和寺に伝来する「色絵瓔珞文花生」(重要文化財)の胴には、赤、青、金の色絵で蝶や卍の他に複雑な瓔珞文様を描いている。17世紀後半、京都の仁清の代表作の一つといわれている。

山東京伝の洒落本つうけんそうまがき『通言総籙』(天明七年・1787年刊)の二に「ようらくでのふた茶碗のなかは…」とある。瓔珞文様を器の周囲に描いたやきものを「瓔珞手」といったのであろう。ふた茶碗は「奈良茶碗」ともいわれる蓋と身がセットになった茶碗である。

長崎県三川内焼の唐子文様のついた茶碗の口縁部内外には「リンボウ」と地元で呼ぶ瓔珞文様がめぐらされている。(写真)これは「高」の字を篆書風に便化したものと紹介されている。(『肥前陶磁史考』)

同じ三川内焼でも、より端正な瓔珞文様を描いた作品があり、それは明確なバルメット文とわかる瓔珞文様である。作品に応じて瓔珞文様は変化することがわかる。(吉永陽三)



染付唐子文茶碗
三川内焼
文政4年(1821)
箱書
当館蔵

シリーズ

やきものの技法 (18)

 と
 飛 び 鉤

生乾きの素地を破線状に削って文様を施すこと。ろくろの上に生素地をおき、回転している素地に弾力性のある鉤や鉤かんなをあてると、飛び飛びに素地の表面が削られる。よって飛び鉤と、躍り鉤おど、撥ね鉤はなどと呼ばれる。信楽ではトチリとも呼ばれている。

飛び鉤は通常化粧土を施してから行われる。褐色の素地に白い化粧土を掛けると、見かけは白い焼物となる。この表面の白い化粧土の層を削り取ると、下の褐色の素地が現れ、白地に褐色の文様ができる。逆に素地の色が白く化粧土が黒い場合は、黒地に白い文様ができる。

飛び鉤は化粧土を施さなくてもなされる。素地に破線状の凹凸がつけられ、褐色の飴釉を掛けると、釉薬の濃淡が生まれ、それが文様となって器面に変化がつけられる。しかし、飛び鉤特有の軽快さは、化粧土を施したほうがより鮮明となる。



褐釉飛び鉤文瓢形瓶
有田皿山
17世紀後半
館蔵

飛び鉤の古い例では、中国磁州窯の作品が知られている。磁州窯は化粧土の掛け方が複雑で、薄茶色の素地に白い化粧土を掛け、さらにその上から黒い化粧土を掛けている。よって飛び鉤を施すと、黒地に白い点が現れる。またこの状態の文様を飛白文という。

日本の焼物では、小鹿田焼や小石原焼などの陶器窯でよく見られる。化粧土を施すことが多いため、飛び鉤は陶器の装飾技法である場合が多い。しかし磁器の作品にもたまにみられ、写真の瓶のように17世紀中葉には既に有田でも飛び鉤がおこなわれている。

(鈴田由紀夫)

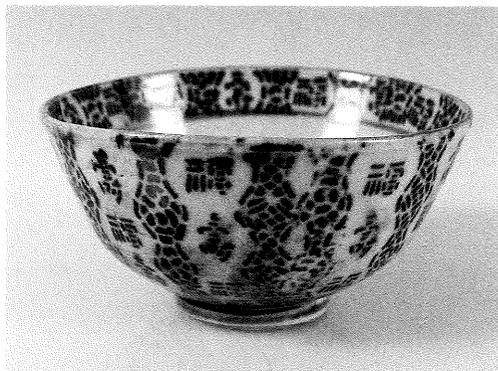
陶磁資料寄贈者芳名(敬称略)

〔平成元年4月1日～2年3月31日〕

九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

またご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展(平成2年5月29日～6月10日)に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

- | | | |
|------|-----|--------------------------------------|
| 笹倉一男 | 福岡県 | 青磁瓶掛、染付山水文猪口、染付鷺文変形皿、青磁陰刻寿字文皿、染付雲龍文碗 |
| 森山 功 | 佐賀県 | 型紙染付福寿字文碗、型紙染付花文碗 |
| 中溝賢三 | 佐賀県 | 染付鉄釉貝蟹磯巾着文鉢 |
| 山崎隆生 | 福岡県 | 黄地五彩花蝶文碗・皿 |
| 小川大樹 | 長崎県 | 飴釉壺、色絵桐唐獅子文皿、色絵人物文鉢 |
| 小橋一朗 | 埼玉県 | 青磁陽刻算木文香炉、青磁染付鶴文小皿、染付青磁唐花文碗、青磁陽刻瓜文皿 |
| 富樫次男 | 秋田県 | 錆釉染付雲龍文深皿、染付寿字文皿、染付瓢箪文皿 |
| 中島政利 | 佐賀県 | 染付徳利(昭和9年銘)、染付火入(嘉永3年銘) |



かたがみそめつけよくじゅじもんわん
型紙染付福寿字文碗
愛媛・砥部焼 20世紀初頭 森山氏贈



そめつけてつゆうかいかにいそぎんちやくもんはち
染付鉄釉貝蟹磯巾着文鉢
三川内焼 19世紀 中溝氏贈



さびゆうそめつけうんりゅうもんふかざら
錆釉染付雲龍文深皿
有田皿山 18世紀後半 富樫氏贈



そめつけうんりゅうもんわん
染付雲龍文碗
中国・明朝 16世紀後半 笹倉氏贈

利用案内

- | | |
|-----|---|
| 開館 | 午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始(12月28日～1月4日)休館 |
| 観覧料 | 一般200円(150円) / 大学・高校生150円(100円) / 中・小学生70円(50円) / ()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。 |
| 交通 | 佐世保線有田駅下車徒歩15分 |